機能的都市と社会主義都市

―近代主義建築と全体主義期ソヴィエト建築の相互関係の導入として―

Funcional City and Socialist City: Introduction of an Interrelationship between Modern Architecture and Soviet Architecture in the Totalitarian Era

鈴木 佑也

Yuya Suzuki

0. はじめに

1932 年の党中央部執行委員会による「文芸諸団体の再編に関する決議」が採択されたことにより、ソヴィエト建築界においても共産党政府の方針に従った建築のあり方が議論される。「内容においては社会主義的、形式においては民族的」[1]。このテーゼは I.スターリンによって 1930 年に発表され、社会主義下でのソ連諸民族の文化形態について言及した部分からの引用である。このテーゼは、社会主義リアリズムという制度化された芸術方針を補強するかたちで作品の評価基準として用いられるようになっていく。建築分野においても前衛的な表現形態は「芸術のための芸術」を追求する「形式主義」として断罪され、それに取って代わって「わかりやすい」かたちで美を提供しかつ党政府の政治方針ないしは課題等を主題としたものが主流となる。建築界では特に歴史主義建築の源泉（古代ローマ･ギリシア、ルネサンスの建築様式を踏襲したスタイル）が好まれ、「古典の習得」というスローガンのもとソヴィエト国家様式として社会主義リアリズムに則った建築様式が模索さ

[1] *Сталин И.* Политический отчет Центрального комитета XVI съезду ВКП (б) от 27 июня 1930 года // Правда. 1930. 29 июня. № 177.

れ始められる。その中で近代主義建築を支持するソヴィエト国内の建築家団体及び建築家達は「形式主義的」もしくは「過去のもの」と非難の対象となる。こうした流れの中で、前衛芸術の流れを汲み、近代主義建築を軸にして住宅や都市計画の問題解決を図ろうとするCIAM（Congrès International d'Architecture Moderne: 近代建築国際会議）とソヴィエト建築界は交流を保っていた。このことは、ソヴィエト建築界が歴史主義的な方向性へとすぐに舵を切ったわけではないことを示している。また 1932-33 年にかけてこの国際建築家団体がモスクワで国際会議の開催を企画しており、こうした点はこの時代を対象としたソヴィエト建築界及びCIAMに関連した先行研究でも扱われている[2]。本稿ではこうした先行研究を踏まえ、ソヴィエト建築界とCIAMとの交流に大きく影響を与えていた機能的都市と社会主義都市を本稿では扱うこととする。機能的都市とはCIAMが主催し企画を予定していた第四回国際建築家会議のテーマであり、後に『アテネ憲章』としてまとめられ近代主義建築における都市計画の指針となる。一方、社会主義都市は第一次五カ年計画による計画経済の下でソヴィエト建築界で登場した日常生活の改編を伴った都市形態のあり方である。この二つのテーマを基にソヴィエト建築界とCIAMが何故距離を縮めることになったのか。この点を明らかにすることで、近代主義建築と相反する歴史主義建築へと傾倒していくソヴィエト建築界の状況をより詳細に把握する一助となる。そのため本稿では最初に当時のソヴィエト建築界とCIAMの状況についてまとめ、その中でどのようなかたちで互いに接触が始まったかを述べることにして、次にCIAMが掲げた機能的都市の成り立ちと

[2] ソヴィエト建築界側からこの事情を扱ったものとしては *Хмельницкий Д.С.* Архитектура Сталина. Психология и стиль. М., 2007. С. 133-146; *Самохина Т.Н.* К истории несостоявшегося Международного конгресса современной архитектуры (СИАМ) в Москве / Советское градостроительство 1920-1930-х. Новые исследования и материалы. М., 2008. С.29-37.が挙げられる。CIAM 側からでは Martine Steinmann “Political Standpoints in CIAM 1923-1933” *Architectural Quarterly*, no. 4 (1972), pp. 49-55; John_R. Gold “Creating the Charter of Athens CIAM and the functional city, 1933-1943,” *The Town Planning Review* 69, no. 3 (1998), pp. 225-247; Eric Mumford *The CIAM Discourse on Urbanism, 1928-1960* (Cambridge: MIT Press, 2000), pp. 44-49, 71-73; Eric Mumford “CIAM the Communist Bloc, 1928-1959” *The Journal of Architecture* 14, no. 2 (2009), pp. 237-254; Kees Somer *The Functional City* (NAI Publishers: Rotterdam, 2007), pp. 82-123; Enrico Chapel “CIAM 4 and Problems of Visualization in Modern Town Planning” *Atlas Of The Functional City CIAM 4 And Comparative Urban Analysis* (Gta Verlag / Eth Zurich: Zurich, 2014), p. 27-37; Vincent van Rossem “Cornelis van Eesteren and the Rise of Urban Planning” *Atlas Of The Functional City CIAM*, p. 38-48. が代表的なものとして挙げられる。

その概略、そして社会主義都市の概略とその中で生じた問題点を取り上げ、最後に機能的都市と社会主義都市の相違点をまとめるかたちとなる。

1. CIAM とソヴィエト建築界のつながり

CIAM はル･コルビュジェ、ジークフリート･ギーディオン、コーネリス･ファン･エーステレンが中心となり 1928 年に結成され、近代主義建築の普及に務めた団体である。メンバーの活動する国々で毎回テーマを決め定期的に国際会議を行い、またそのテーマに関する展覧会を開催し、1959 年の第十回まで機関としての活動が続けられた。第一回はラ･サラ（スイス）で行われ、その際に CIAM の結成及びこの機関結成の趣旨が宣言された。その中でこの機関の目標として 1)建築の現代的なプログラムをつくる、2)近代主義建築の理念を推奨する、3)こうした考え方を技術、経済および社会の諸団体に紹介すること、建築問題の解決策を調査するということを掲げる。こうした機関が立ち上げられた背景として、1920 年代前半から勃興した芸術分野でのアヴァンギャルドがあり、建築分野においても 1920 年代半ばからその実践例として競技設計での設計や住居設計にその動きが見られ、新しい建築運動としての素地がドイツ、オランダ、スイスなどで登場した。CIAM の中心メンバーとなったのはスイスで活躍し国際構成主義運動の流れから生み出された雑誌『ABC: Beitrage zum Bauen』のメンバー（ハンス･シュミット、マルト･スタム）、スイス工作連盟からはヴェルナー･マックス･モーザー、バウハウスからはワルター･グロピウスとミース･ファン･デ･ローエ、デ･スティルからは C.エーステレンが参加しており、近代主義建築を推奨するとは言え、政治的な態度や建築に対する立ち位置は多様であった。しかしこの団体が結成するきっかけとなったのは、そうした政治的な信条よりも近代主義建築に対する一般評価への危機感であった。特に、建築史家エリック･マンフォードが着目している要因は 1927 年開催の国際連盟本部ビル建築競技設計とドイツ工作連盟が主催したシュトゥツガルトでのヴァイセンホーフ住居展を挙げている[3]。この二つでは機能的な空間構成を基に、鉄筋コンクリートとガラスを建築材料として取り入れ、装飾を省いたスタイルで特徴付け

[3] Mumford *The CIAM Discourse on Urbanism*, pp. 11-12.

られるような設計の作品が着目され、またそうした設計案及び作品が「急進的なもの」として紹介され、建築家達の中では「新しい建築の流れ」と認知されたが、一般的にはにその受け入れ素地が整っていなかった。そのため第一回で掲げられた目標を共有する建築家達がこの機関に参加し、新しい建築の流れ（近代主義建築）を一般に広めようとしたのであった。

CIAM 結成と同時期のソヴィエト建築界では、このような新しい建築の流れを支持する建築家団体がいくつかあり、1920 年末頃にはソヴィエト建築界の主流を占めるようになっていた。その中でも機能的な空間構成と最新の建築材料、そして無駄な装飾の排除を基にした設計案を作成し、建築活動を行っていた OSA（Ob'edinenie sovremennykh arkhitektorov: 現代建築家連合）、ASNOVA（Assotsiatsiya novykh arkhitektorov: 新建築家協会）、ARU（Ob'edinenie arkhitektorov-urbanistov: アーバニズム建築家連合）という三つのグループ、そしてプロレタリア建築という階級建築を標榜しながらもスタイルはこの三つの団体と遜色のない VOPRA（Vserossiiskoe ob'edinenie (Vsesoyuznoe obshchestvo) proletarskikh arkhitektorov: 全ロシア（全連邦）プロレタリア建築家連合）がソヴィエト建築界の近代主義建築を牽引していた。当時の建築競技設計に数多く設計案を提出し、また建築設計を積極的に行い、彼らの活動のみを紹介する建築雑誌が出版され、彼らの活動は隆盛を極めていた。例えば 1926 年から 1930 年まで創刊されていた雑誌『現代建築』では上記の建築家団体の設計案紹介、ヨーロッパにおける近代主義建築の紹介がなされている。1928 年に開催されたモスクワの消費者同盟（通称：ツェントロソユーズ）ビルの建築競技設計では国外から何人かの建築家を招聘し、コルビュジェによる設計案が採択されている。また 1930 年に開催されたモスクワの文化宮殿建築競技設計で提出された設計案のほぼ全てが歴史主義建築のスタイルからはほど遠く CIAM のメンバーが推奨する建築の流れができていたといえる。また歴史主義建築やの旗手であったソヴィエトの建築家達（イヴァン･ジョルトフスキー、ヴラジーミル･シチューコ、アレクセイ･シチューセフ）も 1920 年代半ばから 1930 年代始めにかけては、近代主義建築のスタイルで手がけた建築作品及び設計案を制作して

おり、ソヴィエト建築界では抗しきれない大きな流れであった

CIAM は確かに近代主義建築を掲げていたものの、その近代主義建築が社会に根付くということ、様式やスタイルといった建築表現形式を単に伝播させることではなく、そのような表現形式を取り入れた建築を通じて既存の都市を変えていくという目標を掲げていた。そのため、当時の都市部での住宅問題、都市計画や地区計画への関心が次第に高まり、開催されるテーマは「最小住宅」、「合理的な土地開発」、「機能的都市」、「住居と土地造成」といったものとなった。こうした中で、彼らが推奨する建築表現形式が受け入れられており、CIAM の第一回と第二回目の会議に非公式ではあるがソヴィエトからの参加者（E.リシツキーと M.ギンスブルク、ニコライ･コリ）がおり[4]、またメンバーであった E.マイと H.シュミット､M.スタムが 1930 年にソヴィエト政府から招聘され新都市計画及び地区再編を依頼されていたことから、CIAM メンバーの中にソヴィエト建築への関心が高まっていた。また 1929 年の時点で中心メンバーである C.エーステレンがグロピウスに対してモスクワでの会議開催を提案しており、CIAM 結成当初からソヴィエト建築への関心が高かったと言える、1930 年の夏に CIAM メンバーであったワルター･グロピウスからベルリンに駐在するソ連全権代表宛てにモスクワで CIAM の国際会議開催が打診された[5]。

この打診に対する受け入れ先となったのはソヴィエト国内で住宅政策に一定の影響力を有していた機関である住宅協同組合（Zhilishchnaya kooperatsiya）であった。この機関はソヴィエト共産党中央執行委員会及び人民委員会議の決議によって 1924 年に設立され[6]､1930 年の時点でヨーロッパにおける住宅政策および建設の情報を積極的に入手していた。なぜならばそうした「西欧諸国での住宅建設に関する新たな動き」は、1930 年当時では「労働者住宅建設と関連したソ連国内の組織及び個人からなる広範な団体にほとんど知られてい

[4] Martin Steinmann *CIAM : internationale Kongresse für neues Bauen ; Dokumente 1928-1939* (Basel: Birkhäuser, 1979), S. 213.

[5] ГАРФ, ф. 3316, оп. 23, ед. хр. 637, л. 2-4.

[6] О жилищной кооперации: Постановление ЦИК СССР, СНК СССР от 19 августа 1924 г. // Собрание законодательства СССР. 1924. Но. 5. С. 60.

ない」[7]からである。住宅問題改善のため設立されて以来、この組合は組合員の資金及び国家が有する住宅用の総面積の一本化を図ることが目的とされ、結果として住宅建設の管理や関連行政にも影響を及ぼすようになっていく。これと関連するかたちで、住居文化の整備及びそれに伴った日常生活における役務の充実を図るための提案を行っている[8]。こうしたことからCIAMのような動向を、経済的観点及び新たな建築材料を用いるという点からだけではなく、新たな住居文化の提案という観点からソヴィエトの住宅政策にとって有益と住宅組合が見なしていたのは想像に難くない。最終的にはこの機関と全ロシア中央執行委員会付属の公共事業会議（Sovet Kommunal'nogo Khozyaistva）を中心として、CIAMと共同で開催するモスクワでの第四回国際会議の準備が行われていくことになる[9]。この打診が行われた時点で会議の内容は伝えられていないが、第三回CIAM会議終了後から次の開催地を決定する会合においてモスクワが決まり、テーマは機能的都市となった。

2. 機能的都市とCIAMにおける都市へのアプローチ

CIAMメンバーがモスクワで議論のテーマとした機能的都市は、どういったものなのか。またモスクワで開催するにあたり機能的都市のような都市へのアプローチは当時のソヴィエト建築界にあったのか。まずはCIAMがテーマとして設定した機能的都市のいきさつについて見ていくことにしよう。

CIAMは都市の重要な構成要素を「住居、労働、余暇、結合的要因としての交通」から成るものとして、これらの要素が「都市を形作る上で決定的となっている」[10]としている。この要素をより細かな形で統計化して分析することで最終的には合理的な土地活用と都市計画を理論化することが目標であった。このことに関する議論が、第四回国際会議つまりモスクワで予定した会議の趣旨として1931年以降の準備段階で整えられていく。この時点

[7] ГАРФ. ф. 5451. оп. 14. ед. хр. 468. л. 1.

[8] ГАРФ. ф. 5451. оп. 16. ед. хр. 709. л. 14-15. この提案の中で後述する社会主義都市の中で提唱される家事の共有化を推進する施設の建設や託児施設の充実などが挙げられている。

[9] ГАРФ. ф. 5283. оп. 12. ед. хр. 197. л. 33.

[10] ГАРФ, ф. 5283, оп. 12, ед. хр. 189, л.111.

で機能的都市は明確に定義付けられていなかった。むしろ既存の都市を調査する方法（統計、地区の比較）や都市計画に関する議論を通じて合理的な方法論を確立するための１つの方向性としてこの機能的都市という名称が登場したと言えよう。この理論の主導者であるC.エーステレンは「異なる都市を統一された手法で分析し、比較を行い、それらを基に結論を導く」[11]と述べている。そのため、機能的都市は都市計画に対する一定の評価基準を設けるための試みであったことがわかる。

このような評価基準設定の試みは、彼の都市に対するまなざしに起因している。C.エーステレンは、都市そのものを身体に近い構造体として考えていた。個々の要素が有機的につながり、一つの全体として都市を形成するため、彼にとって「都市要素」の有機性が重要となる。このような考えは、ニューヨークのような現代的な都市が混沌としており、「未だ新たな形態をなし得ていない」という分析や、そしてベルリンの目抜き通りであるウンター･デン･リンデンのような歴史的な街並も「現代的な混沌となっており、統一的なものに向けて整理されてこなかった様々な時代から成る要素を伴っている」[12]という分析から導かれている。こうしたことが生じたのは、都市そのものが建築家によってかたちづくられたためと彼は歴史的背景を論じ、次のように語っている：

聡明な建築家の何人かは、今日の都市を分析しようとする代わりに、歴史上の都市を分析し始め、そこに自らの美学的規則を調和させようとしてきた。だから彼らはファサードや劇場にあるまがいものしか造れないということを認識していなかったのだ。彼らは都市の表面、都市の皮相で作業を行っているに過ぎなかった。彼らは病理に触れてこなかったのである[13]。

ここから建築物を都市における要素とC.エーステレンは見なしていることがわかる。こうしたことが今まで重要視されてきたのは、都市全体と個である建築物という関係性に基

[11] Somer *The Functional City*, p. 84.

[12] C. van Eesteren *The idea of the functional city* (Rotterdam: NAi Publishers; Den Haag: EFL Publishers, 1997), p. 27.

[13] Ibid., p. 51.

づき建築家が設計を行うため、周囲の建築物やそのほかの要素との調和が取られていなかったと彼は指摘しているのである。ここから都市を中心にした場合、その構造を創り出すのは建築家ではなく都市設計家であり、都市設計家に現代都市を生み出す期待が寄せられている。「都市設計家が求めるべきものは、新しい集積、新しいコンポジション、定住地を区分けするための基盤である[…]都市計画において統一と均衡が中心化と脱中心化のあいだで求められなければならない」[14]。この発言から C.エーステレンは都市そのものだけではなく、都市を取り巻く郊外との関係にも着目していることがわかる。こうした「統一と均衡」は建築家ではなく「都市設計家」が担い、都市要素の配置を分析的に行うことで果たされたとする。その前段階として既存の都市の調査と分析が C.エーステレンにとっては重要であり、機能的都市を議論する上での必須条件となるのであった。

この既存の都市の分析と調査は、具体的には対象となる都市の住居、労働、余暇、交通の情報を、1/10,000 と 1/50,000 の地図に色彩や記号などで反映させ、拡大版では住居階数、人口密度、職場と住居の距離、縮小版では都市周辺の土地の活用、レジャー施設の配置といったデータの集計から導き出される都市及び地区の組み立て方を目指していた。

例として挙げられるのは、C.エーステレンによるアムステルダム調査である。ここでは機能的都市を審議するための資料として人口、雇用、交通などの統計データを分布させたアムステルダムの地図が例として提示されている（図 1)。その提示方法は一つの地図に全ての情報を記載したものではなく、いくつかのレイヤー（人口分布、交通網、居住地区、産業など)に分けて提示され、他の都市との比較が容易になるように工夫がなされている。またイメージとして C.エーステレンは「既存の都市のカウンターイメージ」[15]を考えており、グリッド状に道路が配置され、その区切られた部分に住居や商業施設、労働環境を配置するという、幾何学形態を基にした構成であった（図 2)。こうした建築物の配置に幾何学的形態を反映しようとする傾向はコルビュジェのモスクワ計画（「緑の街」）の中にも見られ、CIAM のメンバーにもこのイメージが共有されていたと考えることができる。

---

[14] Ibid., p. 27.

[15] Mumford *The CIAM Discourse on Urbanism*, p. 61.

このC.エーステレンによる機能的都市の青写真が提示されたのは、1931年ベルリンで開催された特別会議であり、そこではこの機能的都市がモスクワで議題となることを念頭にした審議が行われた。この会議では、ソヴィエトで当時都市計画を手がけていたE.マイやH.シュミットによるソヴィエトにおける都市計画に関する報告がされた。だが、歴史主義建築を推す流れが生じ、近代主義建築を推す彼らの立場は厳しくなりつつあった。共同開催者のソヴィエト側はこの回答として、ニコライ･ミリューチン著作の「社会主義都市」をCIAM 側に送り、この著作を基にモスクワでの共同開催に向けた準備がすすめられていくことになる。

3. 社会主義都市について

CIAMが参照した社会主義都市とはN.ミリューチンによる著作を基にしたものであり、E.マイや H.シュミットがソヴィエト滞在時の 1930 年に国内で出版されその翌年にはドイツ語で出版された。この著作の中で社会主義都市とは、当時ソヴィエトで実施されていた第一次五カ年計画での生産力向上のため既存の都市及び新造都市における人口再分配を趣旨としたものであった。国家の管理及び統制のもと1928年から導入された五カ年計画では、社会主義体制を盤石なものにするため計画経済及び各種産業の近代化と集団化を推進することが謳われていた。そうした中で労働者の生活改善及び生活様式の変革をもたらす都市生活を念頭に置いたものとして、社会主義都市という理念が登場した。社会主義都市とは、社会主義政権を支えるプロレタリアートが集中し共生する場所としての彼らの入植地を意味している。N.ミリューチンが自らの著作で述べるような「社会主義の原則に依拠した経済の大規模な改革」によって要求される「文化と新たな生活様式の改革」[16]そのものであると言えよう。そのため、都市単位のみならずそれよりも小さな地区単位でもプロレタリアートの入植地ないしは新天地である「社会主義都市」が適用される。建築家アレクサンドル･パステルナークによれば当時の資本主義都市と異なる点として社会主義都市は「住民

[16] *Милютин Н.А.* Проблема строительства социалистических городов: основные вопросы рациональной планировки и строительства населенных мест СССР. М., 1930. С. 8.

数を制限し」、都市に「求められるあらゆる機能が社会主義化され」、「最終的に大きく、『途轍もなく巨大な』単位である共同住宅から構成される」[17]ものとしている。

N.ミリューチンは社会主義体制における都市のあり方を中心に社会主義都市を構想している。例えば、人口の密集をもたらすような産業の極度な集中化を避け、そのシンボルを「生産拠点を基にしてできたのではなく商業と市場の集中によって登場した」「資本主義の断末魔である摩天楼」[18]に見出しているのは特徴的だ。このような商業と市場による一極集中型の都市は「無政府的資本主義のシステム」によって生じたものであるため、これを防ぐための計画的な地区及び都市開発を提唱するのである。とくに大都市部における経済拠点の一極集中またそれに伴って生じる「都市と村落の対立」[19]解消を目指すことが、社会主義都市の根幹となっている。N.ミリューチンによれば、「生産と計画が社会主義経済の軸」であるから、既存の生産拠点を中心に都市を形成し、移住を行うことが社会主義都市の土台となる。その際に新しく施設や定住地区を形成する場合は、既存の生産拠点と関連した施設を中心に配置し、生産活動に伴う原料や燃料の基盤が求められている[20]。つまり、原材料の調達、加工、製品化、研究、さらにはその製品に関連する産業の育成といった生産活動をその地でひとつにまとめ、それらの活動に伴う人材を定住させるというかたちが彼の考える社会主義都市の大枠である

この枠組みを構築するために、彼は鉄道網、生産及び共同事業領域、緑地帯、定住者の住居領域、余暇のための地区、菜園および酪農ソフホーズ（国営農場）地区といった順序で地区計画を行うことを提唱している[21]。またその中で工場や交通網の間に緑地帯を挟むこと、それらの地区からの風向きや衛生に配慮した住居地区の配置も提唱されている。このような点は、CIAM が第四回会議で提唱しようとし、後に『アテネ憲章』（「これからの住居地区は、都市内の最上の空間を占め、地形を利用し、気候に順応し、最も陽当たりの

[17] *Пастернак А*. Споры о будущем города // Современная Архитектура, М., 1930, №.1-2, С.58.

[18] *Милютин*. Проблема строительства социалистических городов. С. 9.

[19] Там же, С. 13.

[20] Там же, С. 20.

[21] Там же, С. 24.

よい、適当な緑地を排した所とすべきである。」[22]）として明文化されることになる住居環境及び都市計画と相通ずる点である。

こうした生産拠点の集中により都市を形成することと同じく、N.ミリューチンが重視するのは「日常の改革」または「社会主義的日常の建設」である。このようなスローガンのもと彼が提言するのは日常生活（主に家事全般）の社会化である。この社会化とは私的及び個別的なものを共同管理、または集団的なものとして運営する形式を確立することを指している。このような社会化を彼が提唱するのは、いくつかの利点を見込んでのことであるが、その第一は労働人口の増加である。家事を集団経営化することにより、女性が家事から解放され、家事に割かれていた時間を労働にまわすことができるとN.ミリューチンは唱える[23]。さらに家事の社会化によって、新たな雇用を生み出すことが可能となり、労働を求めて都市へ人口が流入することを抑制する効果があると述べている。日常生活全般を分業化することで生活の負担を軽減し、労働環境の改善に結びつけ、かつ雇用を創出することでそれまで活用されていなかった労働力が活用されることになり、都市ひいては国家全体の生産力を高めるねらいがある。

このような日常の分業化に必要な物質的基盤、つまり施設や関連する企業の充実をN.ミリューチンは提唱しており、その中では住居、共用施設内の食堂、託児施設、学生用の寮、文化施設としての地区のクラブなどを挙げている。このような施設の充実によって、労働と生活が相互に補完し合い、日常生活の分業化の基盤が整い、「社会主義型のまとまりのある経済」が構築されるとしている。「新しい日常は労働と住居が新たに組織された必然的な結果として、また定住者の日常に必要なサービスを社会化するための設備がよく組織された結果として生み出されなければならない」[24]。そのため、社会主義都市では配置計画が地区及び都市再編において重要な役割を担う。例えば、住居の線状･帯状配置や住居築と並行した鉄道網の配置である。前者は住居の採光面を増やすことで住環境改善へとつながり、後者は道路設置面積を減らし、駅周辺に共同施設を配置することで利便性が図られる（図

[22] ル･コルビュジェ（吉坂隆正訳）『アテネ憲章』鹿島出版会、1976年（原作発表1943年）、74頁。

[23] *Милютин.* Проблема строительства социалистических городов. С. 32.

[24] Там же, С. 37.

3)。こうしたことから、定住者の環境と利便性が折り合うような建築物の形態が、N.ミリューチンの考える社会主義都市では推奨されている。その中でも推奨されているのが水平に展開された形態である。例えばOSAが設計した村落の地区計画（図4）では「住居と日常サービス施設のブロック化」の一例として、N.ミリューチンが推進する建物の配置が取り入れられているが、高層建築物が取り入れられている点に対しては「建物の容積に対して空間が功利的に利用されておらず」[25]、その配置を否定的に評価している。この点は、N.ミリューチンの著作の冒頭で断言するように、摩天楼を「資本主義の断末魔」と見なし、摩天楼が「巨大な中心地の商業と市場を集中することで実現する資本主義的な中央集権を果たす」[26]と考えているからである。

また彼の著作の中ではかつての都市生活からの脱却と社会主義体制下での住民生活の変化を体現する建築物やその中で主流と成るべき建築物のスタイルが挙げられている。そのいくつかの例として、ミース·ファン·デ·ローエのガラスのスカイスクレーパーやル·コルビュジェによるツェントロソユーズビルが紹介されている。このことは、社会主義都市においてCIAMが広めようとしていた近代主義建築の表現形式が取り入れられているというメッセージになっていた。「ソヴィエトの住居建築は、労働者階級が公正かつ簡素であるように、その形態に置いてもそうであるべき」であり、「素材と維持費の面では慎ましく、空間と規模の面ではそうするべきではない」[27]と彼は述べている。このことからも、N.ミリューチンが提唱する「社会主義都市」では個々の建築物のみならず、住居建築を基にして都市を考案しようとするCIAMの「機能的都市」とその方向性が一致していたと言える。そのため、CIAMがソヴィエトでの国際会議を決めた時点で未だ定義されていなかった「機能的都市」のモデルを、彼の「社会主義都市」の中に見出し、モスクワで現地の建築家らとの協議または社会主義都市の問題点を聞き出すことで、ケーススタディとしての社会主義都市を「機能的都市」の一例として組み込もうとしたことが見えてくる。

---

[25] Там же, С. 51.

[26] Там же, С. 9.

[27] Там же, С. 79.

CIAM側およびソヴィエトで都市計画に携わったE.マイやH.シュミットはN.ミリューチンの社会主義都市を基に当時のソヴィエトの都市計画を把握し、その中に彼らが目指す機能的都市の前提条件や必要条件が、社会的制度が異なるとはいえ、導き出されていると考えていた。しかし、当時ソヴィエト国内で社会主義都市はN.ミリューチンによってのみ理論化されたものではなく、経済学者であったL.サブソーヴィチ、既に例として挙げたように建築家A.パステルナークらによっても提唱されている。その中でソヴィエト政府が、特に意見を仰いでいたのがL.サブソーヴィチによる社会主義都市であった。行政側が五カ年計画と連動するかたちで押し進めた社会主義都市はL.サブソーヴィチの著作と調査による社会主義都市であり、N.ミリューチンの意見を基にしたものではない。N.ミリューチンは1930年の段階で出版によって広く世に問うかたちで社会主義都市を提唱したが、L.サブソーヴィチはそれを政府に承認させるため労働防衛評議会における会合でその定義を報告し、それ以降の都市計画では彼の理論を基にしている[28]。ここから、なぜL.サブソーヴィチの理論が参照されたのかを知るため、サブソーヴィチの提唱する社会主義都市とN.ミリューチンの社会主義都市の相違点を整理する必要があろう。

N.ミリューチンとL.サブソーヴィチの社会主義都市の論点の違いはほとんどない。L.サブソーヴィチの唱える「社会主義都市」は、1929年に出版された彼の著作、『15年後のソ連』を基にしたものである。この著作では、第一次五カ年計画における生産力の向上と国民生活全般の集団化を推し薦めるために、取り入れるべき施策やそれに応じて生じうる効果が語られている。そのため、この著作では都市計画及び地区計画であるところの社会主義都市に関する記述は登場しない。しかし、都市の労働者を対象として彼らの生活状況と労働環境を調査しその改善策を述べている。特に女性の家事や炊事からの解放を掲げており、このことが労働人口（著作では21-49歳の男女）の比率を早急に上げ、生産力の向上に結びつくとしている[29]。第一次五カ年計画の目標である生産力向上に関連した「女性を家事全般から解放し労働力に振り分ける」方針によって、その代替である育児所、共同食

[28] ГАРФ, ф. 7059, оп. 1, ед. хр.. 29, л. 1-10.

[29] *Сабсович Л.М.* СССР через 15 лет: гипотеза генерального плана, как построения социализма в СССР. М., 1929. С. 125-126.

堂、大型浴場、クリーニング関連（清掃、洗濯、掃除関連事業）を充実させることを提案する[30]。こうした施設の充実によって生み出される労働者のための環境が、現代（当時）の資本主義国家の都市では満たされておらず、依然としてそのようなことが果たされていないソヴィエトの都市は「未整備かつ有害でまた小屋に済んでいる住民にとって退屈なもので、存在意義を失うことになる」[31]。そのため「別のタイプの（都市の）開拓」[32]が必要と L.サブソーヴィチは説くのである。この「別のタイプ」が社会主義都市であり、『15 年後のソ連』出版の翌年に改めて社会主義都市のみに焦点をあてた著作『社会主義都市』が登場するのである。ここで注意しなければならないのは、L.サブソーヴィチが提唱する社会主義都市が当時の建築及び都市計画の文脈からではなく、国家主導の計画経済である第一次五カ年計画に応じるかたちで登場したということである。この計画経済の導入は国力の増強に関連した「ソヴィエト労働者の住環境を根本的に変えるという課題」[33]であり、国家もしくは政府によって管理可能な「健康的かつ文化的な日常生活の共有化に寄与する新たな入植地」の建設へと向けられる。そのため「社会主義都市」の発端は、既存の都市をマッピングし、その中で生じている問題の解決に向けた CIAM の考える都市及び地区計画とは異なっている。この点は彼の著作『社会主義都市』で、さらに強調されている：

都市の問題を我々は全体的な計画という観点から解決しなければならず、一方で国民経済の全体的な計画を我々が打ち立てられるのは社会主義建設の計画としてである[…] 都市の問題を我々は社会主義都市の問題として解決を図り、また都市再建の問題を、実現された社会主義体制下で、国家の発展という全般的な要求に対し応用するかたちで解決を図らなければならない[…] 産業や農業、交通の発展が社会主義建設に向けた物質的基盤を創り上げることになるとすれば、我々の都市及び村落の再建は社会主義的日常を実現させるための直接的な環境であり、そして社会主義達成のための直接的な環境を創

[30] Там же, С. 127.

[31] Там же, С. 130.

[32] Там же.

[33] Там же, С. 132.

り出すはずである[34]。

L.サブソーヴィチが描く都市とは社会主義体制と密接につながっているものである。ただし、社会主義体制の方針に応じて都市が規定されるため、厳密な管理と統制によって創り出されることになる。風土や地形といった特殊性を除いて、社会主義都市は建設及び再建の対象となる土地において独自に形成されるということはなく、画一的なモデルによって形成されることが『社会主義都市』では望まれていた。一方でその社会主義体制によって予め計画された国家像もしくは社会像、つまり五カ年計画という計画経済によって達せられる将来像を基にしてこのモデルを作成している点は否めない。その中でも交通手段の発展が念頭に置かれているのは興味深い。「密な交通網の発達によって[…]、巨大都市の建設を避けて、ソヴィエト連邦内の至る所にかなり自由なかたちで生産業を配置することができる」[35]。こうしたことは、農業の集団化によって機械化が進み、第一次五カ年計画導入後の 3-4 年の間で交通網が整備されることを前提としている。こうした前提が提示されるのは、『15 年後のソ連』で報告されているように、当時国家計画院によって立案された国家経済の中でも鉄道を含めた交通機関からの収益が大幅に見込まれており、資本投資比率も他の分野に比べて高く見積もられているからである[36]。こうしたことからも彼が提唱する社会主義都市は第一次五カ年計画を基にした経済の見通しと不可分であり、その見通しを実現するための手段として位置付けられていたと考えることができる。

こうしたことを総合するとN.ミリューチンとL.サブソーヴィチがそれぞれの『社会主義都市』で提唱した社会主義都市とは都市計画というよりも都市計画を伴った社会主義的日常生活の構築であった。ただし政府は、1930 年の 5 月 16 日付「日常生活変革に関する労務について」のソヴィエト共産党中央委員会決議では彼らの性急な提案を戒めている。「現存する都市の再編や新しい都市の建設といったものは日和見主義者の本性を隠している…何人かの労働者たちの試みであり、それらは労働者の日常のあらゆる側面を早急かつ完全

[34] *Сабсович Л.* Социалистические города. М., 1930, С. 8.

[35] Там же, С. 23.

[36] *Сабсович*. СССР через 15 лет. С. 140.

なる共同化と... 家族の結びつきの排除と食卓の準備を行政によって禁止することを伴っている」[37]。このことは政府主導による日常生活の改編を伴った都市計画では、家庭や大都市の根本的な改編は望まれず現状を維持しながら政策に応じて地区及び都市を再編するという方向性であると言える。共産党中央委員会の「日常生活の再編の労務に関する」決議や中央委員会幹部会が発した「モスクワ市の経済及びソヴィエトの都市経済発展に関する」決議は、都市経済を中心とした労働力の再編成を目的としていた。そのため、社会主義都市を対象とした場合、重点を置くポイントが異なっており、政府からすればいくつかの点で相容れられない部分はあるにしても、その全てを否定しているわけではない。ここから政府は社会主義都市を過渡期にある五カ年計画の中で生じる現象として考えていたのに対して、L.サブソーヴィチや N.ミリューチンは五カ年計画を下支えするモデルとして考えていた。こうした状況が CIAM 国際会議モスクワ開催の企画段階でソヴィエト側には生じており、CIAM のメンバーが参考にしていた N.ミチューリンによる社会主義都市はソヴィエト政府の意向の一部を反映したものに過ぎなかった。飽くまで五カ年計画の生産率を確保する環境整備という側面に社会主義都市の強調点が置かれ、CIAM 側とソヴィエト建築界側では齟齬が生じていたのであった。

結

CIAM が思い描く都市とは、1933 年にアテネで開催となる第四回国際会議で議決された「アテネ憲章」から「経済的、社会的および政治的に一つの全体を構成しているその地域の一部」[38]という考えの基で構築された「厳密な総合計画に従う企業」[39]であった。ここから機能的都市とは住居、労働、余暇、移動の四つの機能が連関して統合されたものである。それは、科学的調査という名の下で各都市の統計及び指標を集積に基づき、その土地の自然条件に即した経済的、社会的、精神的欲求の調和を目指すものであった。その中で彼らが託した機能的都市という理念とその実践が直結していると考えられたソヴィエトにおけ

[37] О работе по перестройке быта: Постановление ЦК ВКП(б) от 16 мая 1930 г. // Правда. 1930. 29 мая. Но. 146.

[38] ル･コルビュジェ『アテネ憲章』（前註 22 参照）54 頁。

[39] 同上、121 頁。

る都市計画、社会主義都市が参考にされたのである。しかし社会主義都市とは、見てきたように、五カ年計画と連動した生産力全般の向上とそれを遂行するための社会生活集団化を実現するために考案されたものであった。確かに科学的調査による分析が社会主義都市でも行われてはいるが、最終的に還元されるのはその都市の生産力に対してであり、必ずしも住民の経済的、社会的、精神的欲求の調和を目指したものではなかった。そのため、CIAM の会議に参加したミース･ファン･デ･ローエが懸念したように社会主義都市は政治問題もしくは政策に深く関連するものであり、CIAM が望まない政府による極度な介入を招くものであった。モスクワで開催を予定していた第四回国際会議でテーマとして設定した機能的都市は、その根本となる都市に対するアプローチが異なるため、既に破綻の様相を示していたと言える。実際に 1931 年から始まるソヴィエト側の準備は、この会議の中心議題を住宅供給と住環境に設定するかたちで進められ、当時建設中であった建築プロジェクトの紹介に留めようとしていた。ここからソヴィエト側は都市を議題にするのではなく建築全般を扱おうとしたのであって、CIAM 側が参考とした社会主義都市は主要テーマとして取り上げる予定に組み込まれることはなかった。この点を考慮すると、機能的都市というコンセプトは社会主義都市と大きく異なるものとしてソヴィエト側には認識されていたことがわかる。そのため両者の歩み寄りは必ずしも近代主義建築をめぐる意見の一致ではなく、社会主義都市を都市計画として俎上に載せようとする CIAM 側からの積極的なはたらきかけによって実現した。このようなはたらきかけにより準備が進められたモスクワでの第四回 CIAM 国際会議は実現しなかったが、その原因はソヴィエト側と CIAM 側の都市に対する見解の相違によるものなのか、または近代主義建築と歴史主義建築の方向性によるものなのか。この点は更なる研究によって明らかにしたい。

図版情報

1. 地図上の表記記号の対応表（上）とそれに対応したアムステルダムの地図の一部（下）、1931-1932 年

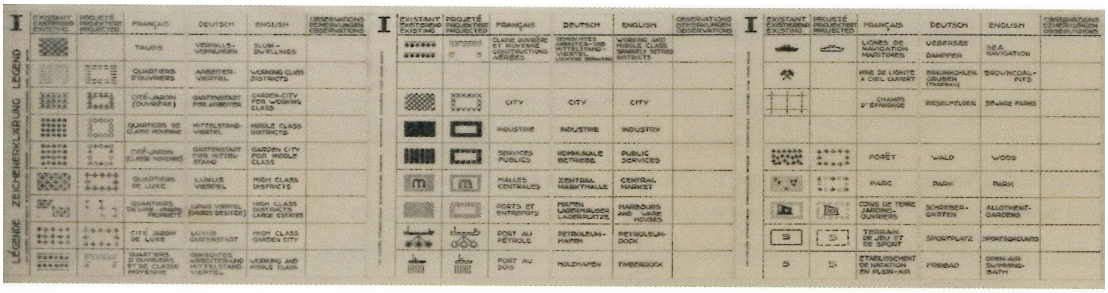
2. C.エーステレン、ベルリンのウンター･デン･リンデン再編競技設計案、1925 年

3. N.ミリューチンによるマグニトゴルスク（ロシア）の地区計画図（1:鉄道、2:,

3:緑地帯、4:道路、5:住居地区、6:公園、7:ウラル川、8:企業群、9:風向、10:会議･集会場）、

1930 年

4. OSA による村落の配置計画模型、1930 年



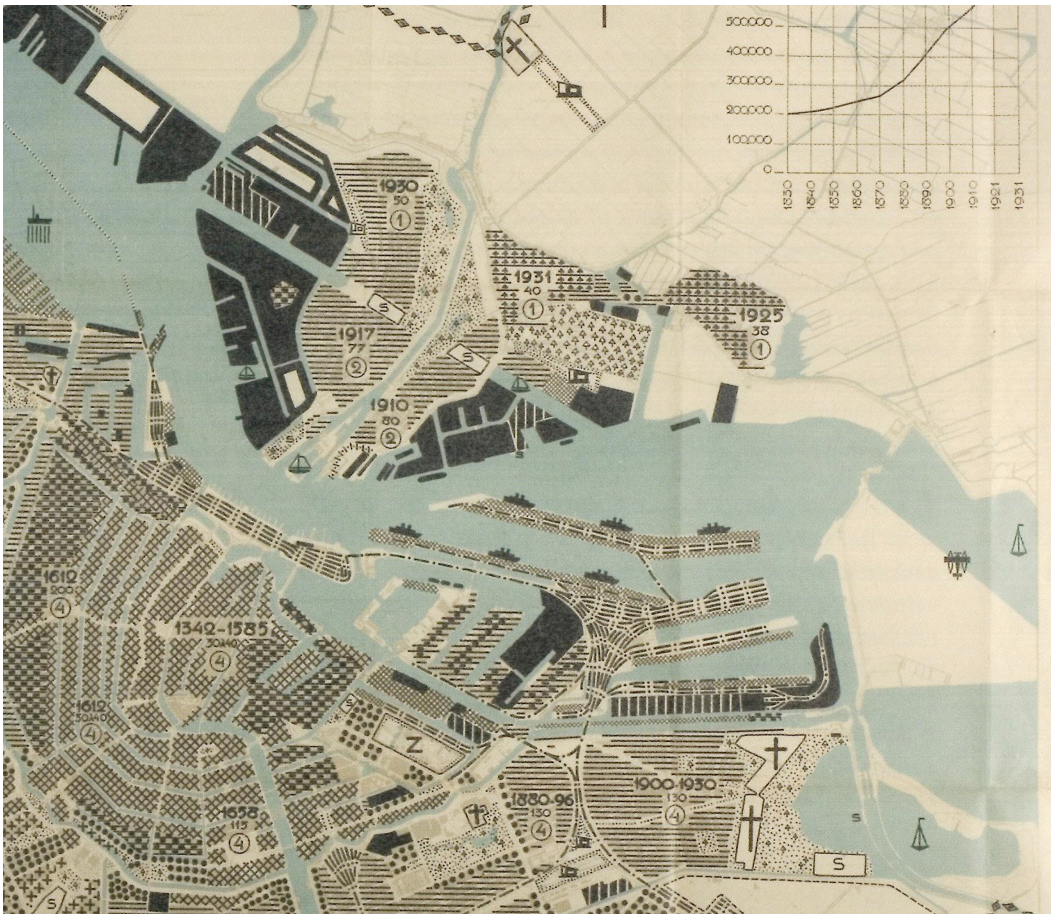


図 1 : 地図上の表記記号の対応表（上）とそれに対応したアムステルダムの地図の一部（下）、

1931-1932 年

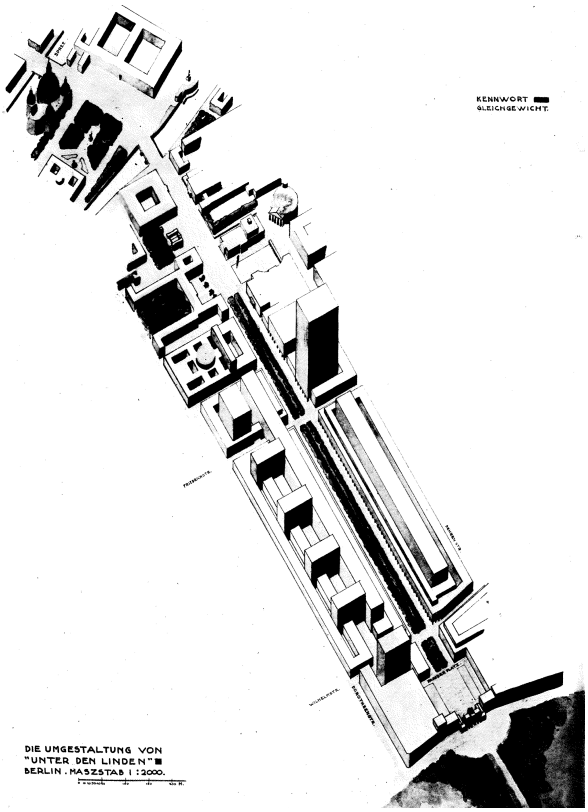


図 2：C.エーステレン、ベルリンのウンター･デン･リンデン再編競技設計案、1925 年

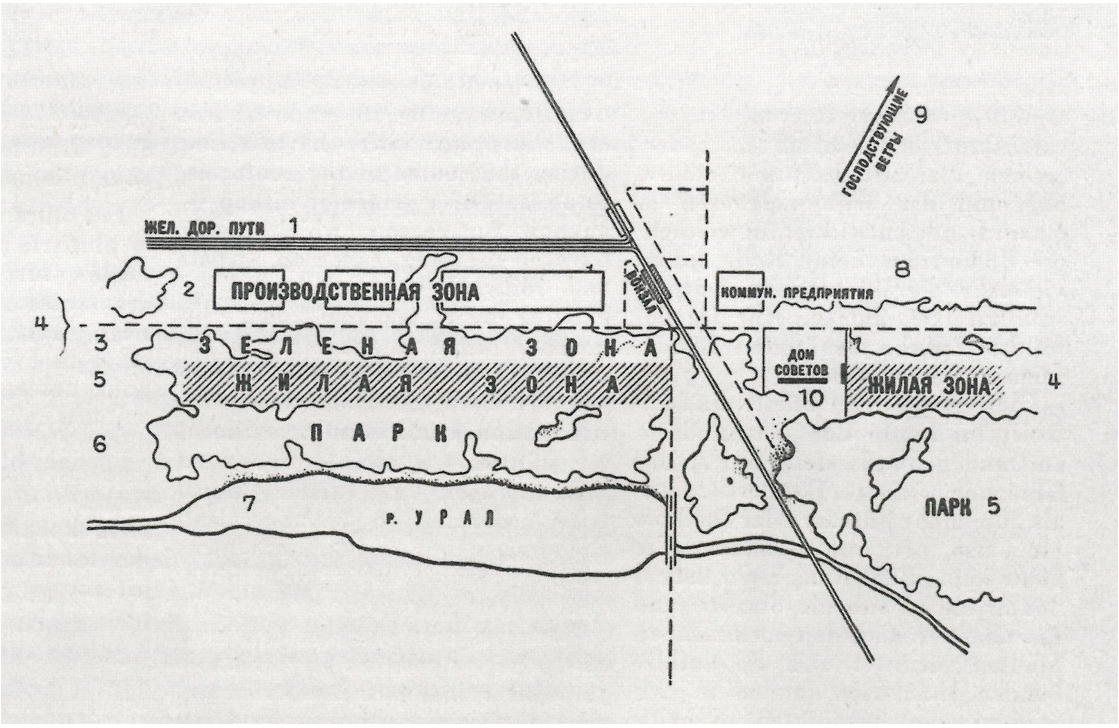


図 3：N.ミリューチンによるマグニトゴルスク（ロシア）の地区計画図（1:鉄道、2:,

3:緑地帯、4:道路、5:住居地区、6:公園、7:ウラル川、8:企業群、9:風向、10:会議･集会場)、1930 年

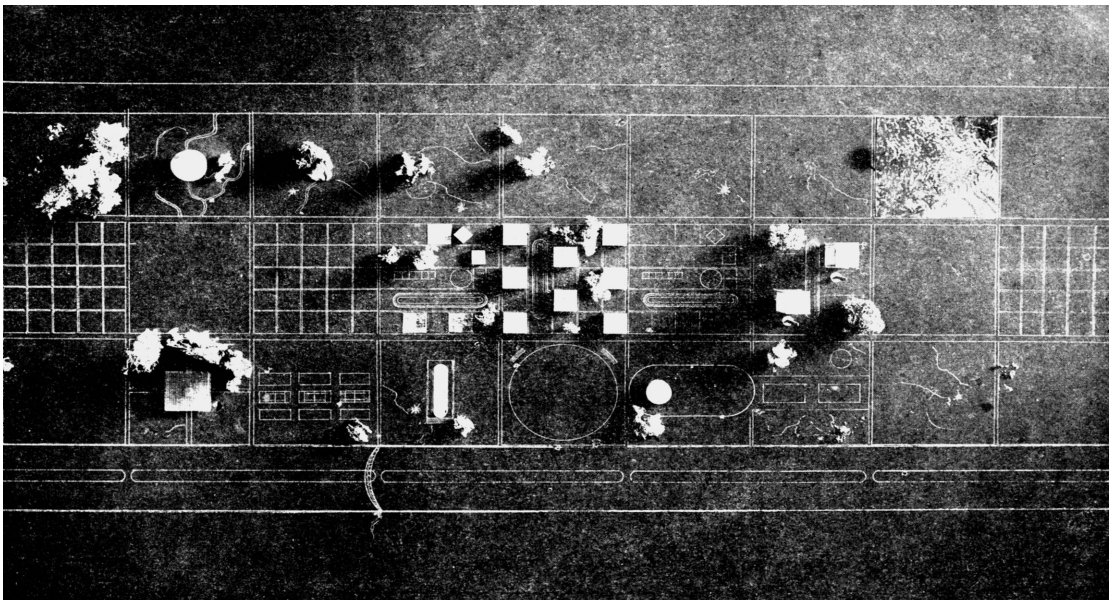


図 4：OSA による村落の配置計画模型、1930 年